おまえざきの人 きらり輝く人

コスモス畑から地域の絆を発信

朝比奈ふれあいの里クラブ

PROFILE 朝比奈ふれあいの里クラブは朝比奈地区の50代から60代の人たちを中心に会員50人で運営している。時間との勝負であるコスモスの栽培を支えているのは、会員同士の団結、そして地域への愛情だ。

病害虫との戦いを乗り越え

毎年11月、新野原から下朝比奈の宮ケ谷への坂を下りきると、一面の赤、ピンク、白のコスモスが咲き乱れる花畑が目の前に現れる。面積にして3ヘクタール、「朝比奈ふれあいの里クラブ」が栽培、管理しているコスモス畑である。

同クラブは、平成15年度からコスモスの栽培を始め、花が見ごろとなる11月上旬にイベントとして「コスモス祭り」を開催している。今年で10回目を迎え、市内だけでなく県内外から訪れる人も増え、近年ではすっかり秋の風物詩として定着している。

平成23年まで、毎年開催していたコスモス祭りだが、「昨年は『夜盗虫』などの害虫による食害であまり花が咲かず、無念の開催中止となった。そんな経験を踏まえ、今年は病害虫の駆除にも力を入れたため、例年にはないとても良い花が咲いた」とクラブの会長である鈴木克巳(下朝比奈)さんは言う。

コスモス畑は、8月下旬までは、実際稲が植えられている田んぼのため、お米の収穫とともにコスモスの種をまき、イベントまでの間病害虫駆除、除草、肥料の散布など会員総出で作業に当たる。

種まきが遅いほど丈の短いコスモスとなり、あまり見栄えがしなくなる。そのため会員たちは「1日でも早く種をまきたい」との思いで気がはやる。コスモスの栽培は時間との勝負だ。

また、クラブには「栽培班」という担当がある。栽培班の宮本耕治(下朝比奈)さんと鈴木一利(下朝比奈)さんは3日に一度は畑の様子を見に行き、種まきからイベントまで約20日間、コスモスの生育を見守る。

地域の絆と共に

鈴木会長は、「このイベントを通じ、地域の絆が深まることで、子どもたちは朝比奈でずっと暮らしたいと思い、他地区に住んでいる人は朝比奈で暮らしてみたいと思えるような地域づくりをしたい」と語ってくれた。

クラブでは、朝比奈地区の史跡巡りなどの新しいイベントも考案中。今後も朝比奈の魅力の発掘が相次ぎそうだ。